

【多摩丘陵・私の出会った生き物たち12】

<ヤドリギ>

桑原紀子

カチンと凍りそうな青空の下、すっかり葉を落としたケヤキの大木が、大きく枝を広げて立っています。そのシルエットの中に鳥の巣のような丸い塊がいくつもついていました。近くで見上げると首が痛くなるような大木で、根元の方では私ひとりでは抱えきれません。幹はうろこがはげるようにポロリと、丸く樹皮がはがれたりしていま



す。その裸のケヤキの枝のあちらこちらに、深緑色の、一抱えもあるようなヤドリギがついているのです。

大きい塊や中位のや様々で、それが鳥の巣のように見えたのです。

双眼鏡で見ると、プロペラ型の緑の葉が茂り、黄緑色の小さな丸い実がいっぱいついています。実は透き通ってピカピカ光っています。ケヤキの葉が茂っている時期は目立たないのに、冬、常緑のヤドリギはケヤキの木の冠のように素敵です。

実が落ちていないか、ヤドリギのついている下辺りをていねいに探すと、肉厚のプロペラ型の葉や、実や、枝ごとポロリと落ちたのや、いろいろ見つけることができました。葉はなめし皮のようにしなやかで、枝は節のところでポロ

リと折れます。実はどんな味かな？となめてみると、ほのかに甘いので、(これなら鳥たちが好きだろうな)と思いました。

でもなんと口の中はねばねば！アラビアゴムをなめたようです。実の中にある種子が、糸を引いてぶら下がっています。ふいてもねばねばは、なかなかとれません。これがヤドリギの種子の秘密なのです。

地面に下りることなく、いろいろな種類の木に寄生して成長していく生き方をヤドリギは選んだのですが、木から別の木にと子孫を増やす時、鳥たちにおいしい実を食べてもらわなくてはなりません。くちばしにくっついた種を取ろうと鳥が枝にこすりつけると、ヤドリギの種子はそのねばねばで枝にくっつき、発芽する仕組みになっています。鳥のおなかに入った種は糞に混じって、やはり枝にくっつくのです。

ヤドリギの種子のことを考えると、改めて自然の不思議な仕組みに感心してしまいます。

今の季節、ヤドリギは遠くからでも目立ちます。鳥たちがどのように種を運んでいるのか、散歩しながらヤドリギウォッチングをしてみると面白いと思います。